

# 創学舎ニユース

No.229

## 親子の関係(五四)

子供達の状態が悪くなったのは、大人達の状態が悪くなったからであるという話を前号で述べた。では、どう悪くなったのか？それがこれからの話の中心となる。

まずは、経済の話から。日本は、戦後、世界にも例のない程の速さで経済復興を成し遂げ、更にこれまた例のない程の発展を遂げたとされる。ある意味でこれは本当である。高度経済成長期といわれた、一九五〇年代後半～一九七〇年代初期まで、確かに日本の伸びは目ざましかった。また、その間の大人達の働きぶりも尋常ではなかった。とにかく、働けば働くほど、自分の生活が物質面で豊かになり、「幸せ度数」も上がるのだから、個人にとつての働く意味も意義も大多数の人には明確であった。そついう意味では「良き時代」であった。そして勿論、私は、その時代に懸命に努力した先人に大いなる敬意を抱いている。何よりも、私自身が高校へ進学し、大学を目指すことができたのもこの先人達のお陰である。私の家族は、ずっと生活保護を受けて生を支えていたし、また奨学金を得て高校への進学をかなえたのだから(もし、こ

の先人達の努力と「良き時代」が存在しなければ、考えただけでもぞつとする)。だから、私は心よりの感謝をしている。

しかし、この「良き時代」はその時代に生きた人にはともかく、後の世代にとつて本当によかつたのだろうか？諸先輩方の怒りをかうことを承知でいえば、この「良き時代」が、「働くこと」「や」「生きること」の本質を分かりにくくさせた負の側面が大きいのではないか？その負の側面が、今の混迷を招いたのではないのか？

さて、日本の復興は東西冷戦が進行悪化する中で始まり、一九五〇年朝鮮戦争の特需により好況に転じる。早くも、一九五一年には鉱工業生産額は戦前水準を突破。その後も、神武景気、岩戸景気、オリンピック景気、いざなぎ景気と続く史上例をみない程の好景気が続いた。これを支えたのは、間違いなく先人達の努力であつたし、日本人の勤勉さであつたことも事実である。しかし、その背景には、定期的に発生した大規模の国際紛争(戦争)があつたのも事実だ。大きいものだけでも朝鮮戦争、スエズ動乱、ベトナム戦争と続き、その多くで日本は米軍の軍需物資補給の役割を担つた。この役割によつて、日本に流入した富は莫大なものとなる。つまり、戦後日本の経済成長の相当部分は、戦争のお陰であつたのだ。

一方、アメリカは相次ぐ戦争で体力を失い、

一九七三年にベトナム戦線から離脱、米国のドルを中心とした経済体制も終わりを迎える。これはすなわち、戦争によつてお金が日本に流れ込む体制の終わりでもあつた。そして、一九七三年の石油ショックによる混乱をもつて高度経済成長も終わりを告げる。(以下次号) (小林)

## 入試直前の過ごし方

いよいよ受験シーズンの到来だ。入試までの日数を数えて、あせっている人も多いはずだ。確かにあせる気持は分かる。私にも覚えのあることだから。しかし、あせりに流されて、今なすべきことを見失つては、これまで養ってきた実力を十分に発揮できぬまま終わってしまうことも。

これまで勉強を続けてきた人は、今が一番学力が充実している時期のはずだ。「最後までガツガツするな。」「直前はゆつたりと過こせ。」という人が多いが、信じてはいけない。テストの直前まで、できるだけのことをする、そして学力の貯金をより確実なものにしておくことこそ成功の秘訣だ。その考えにたつて勉強を進めれば、残された期間が、これまでの何倍もの濃さで過こせるはずだ。

これまでになつてきたものの総復習をし。入試問題は、社会などの時事問題をのぞけば、

ほとんどが既習の知識を組み合わせたものである。だから、一度身につけた(しかし、まだ定着しきつてはいない)知識を更に印象の強いものにしておくことが絶対必要である。その作業も終わらぬまま、「気分を変えよう。」とか「これをみんなやっているから」と新しいものを見つけようとするのは、してはいけない。使ってきたもので、チェックのしてあるものをくり返すこと。また、模試で落とした問題も忘れずにやること。

過去の問題を時間をはかつて解け。自分が受験する学校の問題は、必ずやっておくべきだ。学校によつては、出題の仕方、その内容に大きな特色があつて、それを知つた上で備えれば、大幅な得点アップが可能な場合もある。同じ成績の二人がいて、対策をした場合としない場合で十点位の差がつくことは珍しくない。また、時間配分の練習も過去の問題を使つてやつておかないと痛い目にあつぞ。それから、できなかつた所は、ちゃんと調べてやり直しておく。英数は毎日やれ。不得意な教科を残すな。必要な科目のバランスを考えて勉強しろ。

朝型にきりかえる。こう書くと、朝四時から起きて勉強する人がいるし、そう教える人も又、いるらしいが、とんでもない。朝九時から始まるテストの時に頭が働くようにすればいいことで、六時起床で十分。そして、二十分程度

何か問題を解くと、頭がさえてくるはずだ。

普段と変わった生活をするな。テスト前日も平日も、普段と同じように過ごすこと。とにかく最後は気迫だ。何としても入るといふ気迫をもって、合格をつかんでほしい。(小林)

### 教育「名言」紹介(4)

**玉琢かざれば器と成らず、人学ばざれば道を知らず。**

たまみが

解釈 宝石でも、磨かずに原石のままにしておいたら、真に価値のある物にはならない。それと同様、人も生まれた後に然るべく学習をしなければ、人間としての正しい生き方を知ることができない。

出典 『礼記』(中国・前漢)

解説 中国の古典『礼記』の中の、特に教育について論じた「学記」篇の冒頭部分の言葉。

教育の必要性または重要性を説く際に、よく引用される名言の一つである。

右の名言を肯定的に言い換えると、「宝石の原石は、磨くことによって初めて光り輝き、その真価を發揮することができ。人間も同じように、学ぶことによって初めて人間としてより善い生き方を知ることができるのである」というような意味になる。このような考え方を教

育の本質論に照らし合わせてみると、助成観と

伝達観の理念を同時に内包していることが分かる。

原石を磨き、それを光り輝く状態に上げる、ということとは、原石に備わっているそのような素質を引き出すことであり、人も同様、学ぶこと、すなわち教育によってその潜在能力が開発されることである、と解釈することができる。

このような意味では、助成的教育観であるといえる。しかし、「磨くこと」「学ぶこと」をある特定の価値観または目的意識に沿った知識のつめ込みのプロセスである、と解釈した場合は、伝達教育観とみなされよう。

いずれにせよ、人間にとって「学ぶこと」がどのような意味をもち、人格形成上いかに重要であるかを、見出しの言葉は、実に簡潔に言い表している。「学ぶこと」は、言つまでもなく、本人の欲求と生活環境の要求に順応する、またはそれを改善する方法を獲得するための行為・行動である。「人は、生まれた後に学ぶ機会が与えられなかったら、禽獣に近いものになってしまう」(孟子の言葉)。したがって、見出しの言葉の後に、「故に、古の王は、国家を建設し、人民の君になると、優先的に教学を推進した」と続くのである。

中国はもとより、日本も国家建設上の施策として、伝統的に文教政策に力を入れているのは、

この「玉琢かざれば」の思想、いわば「中国

式学問ノススメ」の影響ではなからうか。また、いわゆる儒教圏出身の人々は、他の地域出身の人々に比べて、教育熱心である、と言われているのも、この教えによるものではないだろうか。(アガトス教育研究所)

### 苦しくてたまらない人へ

受験を前にして苦しくてたまらない人。勉強しながら、涙が出てくる人。何もかも投げ出してしまいたい人。誰も自分の気持ちを分かってくれないと思っている人。

きみの悩みはきみだけのもの、別の人の悩みはその人だけのものである。そして、きみの悩みを他の人が分かってくれないと同様に、きみには他の人の悩みを理解し、助けてあげるだけの力はないのである。その意味で孤独である。しかし、実は、きみの悩みを理解してくれる人間は、必ずいるのだ。ただ、そういう人との出会いを待たなければならぬ。いつ会えるか、それを運という。そして、その運をつかむには、順序よくきちんと悩むことである。

さて、「受験」にしばらく。自分は一体何を望んでいるのか。「楽をしよつ」なんて思うことは誰にでもあるが、楽をしたら最後に待っているのは全力を出さなかった後悔である。自分が望むのは、目標を達成すること、いや目標を達成するために一生懸命になれる自分ではないのか。そこを忘れないこと。歯をくいしばって、でも時には空を見上げて自分が望む自分になろうではないか。きみは幸福になりたい。そしてならなければならない。そのためには、自分が心の底から喜べる願望と正しく向き合いながら歩き続けるしかない。きみが悩みながらもその歩みを続けた時、いつかきみは、その悩みについては、他の人の力になれる人間になっているだろう。それが成長であり、その成長は、言動の端々に現れ、おおいとなって他の人にも伝わる。そのおおいが、同じように成長を遂げた人、成長を目指す人を引き寄せるのだ。その人こそ、きみを理解してくれる人間である。きみは、「プラ又思考」とか「前向き」とか大嫌いだらう(私も同じだ)。きちんと悩もうではないか。因みに、受験に悩んだ私は、だらしない大人の一人ではあるけれども、きみの気持ちはある程度分かるといえる(思いあがりかもしれないが)。経験することは無駄ではない。努力も無駄ではない。今も充分がんばっているが、少し考え方をかえて、もつひとがんばりしてみようではないか。(小林)

卒業や転校等で創学舎を離れる方にも、「希望があれば、創学舎ニユースを無料でお送り致します。在籍した教室までご連絡

2004年(平成16年)12月30日(木曜日)

1405